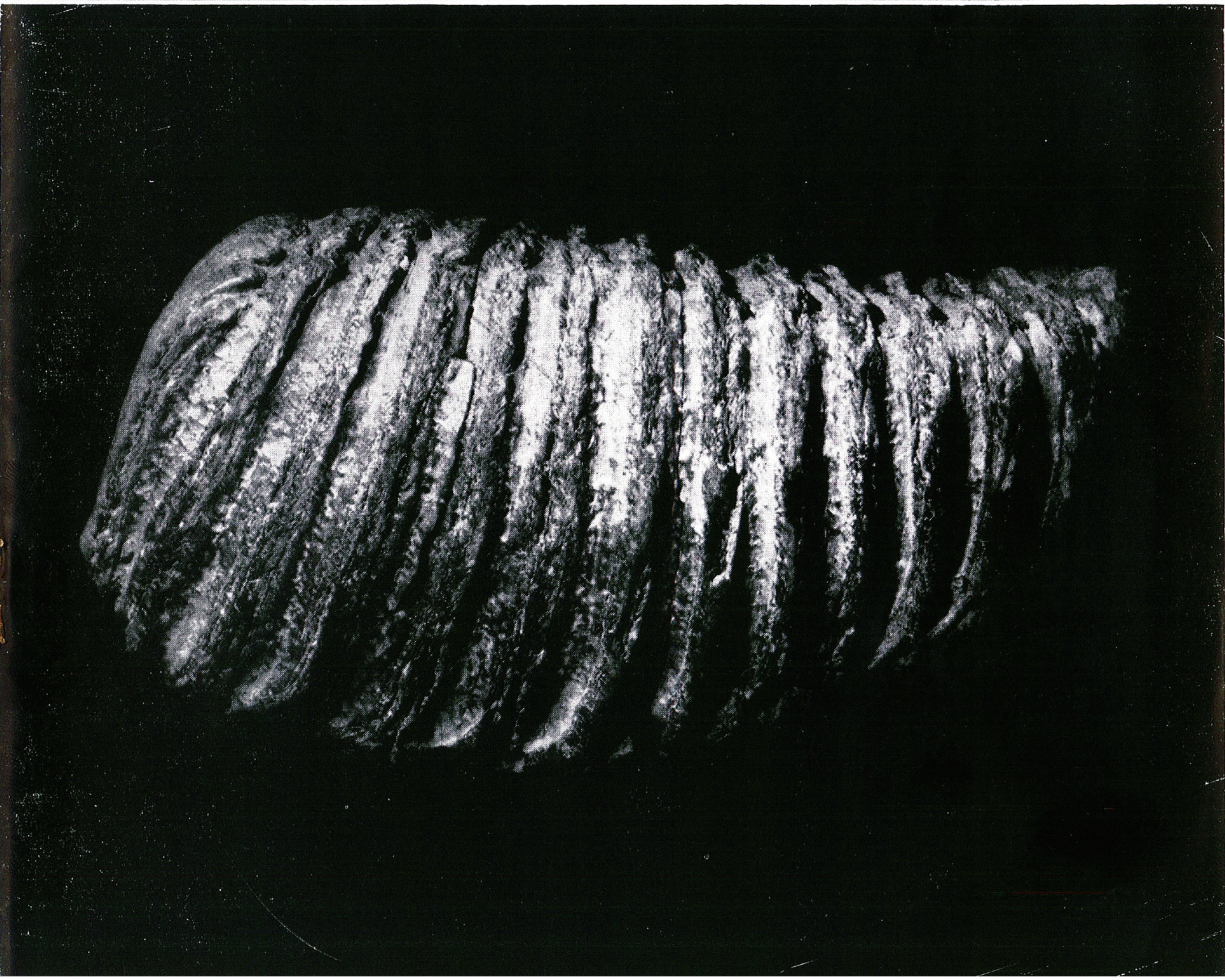
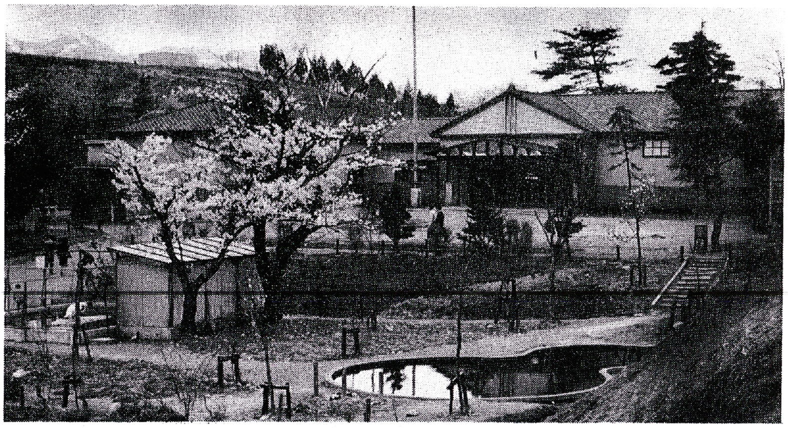
N K H

長岡市立科学博物館報

No. 7　1966





（前から見た博物館）

NKH

No. 7

Jan. 1966

館報の発行について

“市民のための博物館はどうあるべきか”“対象者の水準を中学の低学年においたらどうか”“わかりやすく，生きた博物館を作ろう”

こんなことをみんなで話しあってきました。博物館は，単に，めずらしいものや古いものの保管所であってはならないはずです。市民生活の片すみにそっとなにかをプラスする博物館を作りたいと思います．

そんなことで，まず，みなさんとの結びつきを深めていきたい，という考え方から，ながらく休刊していた『友の会』の会報を，館報として復刊することにしました。今回は，前号までのスタイルに準じましたが，次号からは，みなさんからのご意見も参考にして，たくさんの方方から読んでいただける内容にしたいとねがっております．

（館長，小柴）

目　　次

長岡市立科学博物館を礼讃する　山崎　貫三　1

報　文

アカネズミの繁殖活動　臼杵　秀昭　2

研究室メモ

イトキンポウゲに寄生するウドンコ病菌　西山　邦夫　4

長岡市．岩野原遺跡（調査略報）　中村孝三郎　6

苗場山頂湿原のトンボ　樋熊　清治　8

百草の池（越後駒ヶ岳）のトンボ　樋熊　清治　8

博物館だより　（裏表紙）

表紙デザイン　本間　正三

表紙写真　中村孝三郎

表紙裏写真　渡部　康治

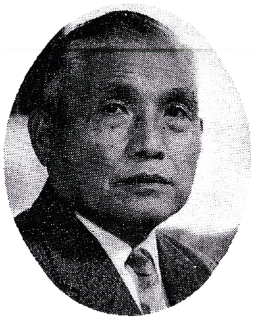
表紙写真

新潟県越路町小坂の竹内豊作さんが，渋海川の門前河原で発見したヤベ象（パレオロクソドン）の大臼歯化石．

（考古，中村）

長岡市立科学博物館を礼讃する

長岡工業高等専門学校長　山　崎　貫　三



長岡市に科学博物館があることを私は市民の一人として，誇りに思っておる．その規模は決して大きいものとはいわれないが，限られた施設と人員，そして経費の範囲でこれだけ内容が充実し，活動しておられるところは少ないと思う．

科学博物館はどのようにあるべきか．もちろん，学校教育と違った立場で，博物館に来る人に，その希望する科学知識慾を満足さすような陳列をし，さらにその科学知識の向上に対しての意慾をかき立てることによって社会全般の科学知識の基盤を高めることであろう．ところで，このような目的を果すためには，ものすごい設備と人員と経費を要する．30数年前に，ドイツのミュンヘンの科学博物館を見学して，その規模のぼう大なことに驚き，ここまで行かなければならないのだと羨ましく思った．自然科学の方面はもちろん，その応用の技術方面についても，至れりつくせりであり，しかもその大部分を，参観者のすべてが，手を触れて実験し得る形に整備せられており，科学の発達課程を示す歴史的な陳列，又開拓に尽した人々のつながりをも示してあった。外国人観光者をも含めて実に参観者が群をなしておった。次に日本では東京上野の国立科学博物館を見，その線に向って出来ておることは認められたが，所謂修学旅行団体を除いては，人影は至って少なく，大部分は全館を駈け足で通り過ぎておるだけのようにしか見られなかった。まだ中途半端な設備で人員が非常に少ないために，目標からは，ほど遠いように見うけられた。もっともこれも十数年前の参観であるが．

ところで科学博物館の役目又はその行き方は，まだ他にあるように思う。即ち博物館は常に科学の進歩と共に絶えず進み，望むらくは研究に加わっておることと，来館する人のみを待つのでなく，できるだけ，ある題目に焦点をあわせた展示会，研究会，講習会を開くことである。小中学生，高校生，大学生等を対象として，たとえば友の会とか，グループとかを結成して，常時流動的な活動することが必要であろう．国立科学博物館のその方面の活動については，私は実は余り知っていないので，その点での前の私の言葉は全く失礼なことになったかも知れないので詫びなければならないかも知れない。

長岡市立としての今の科学博物館が，建物，設備，経費，又人員については，市当局や理事者が，決して理解が足りない等とは言えるものでない．それどころか，他の都市に類のない位奇特な形と思って敬服している．ただこれ以上さらに，できるだけの理解をお願いするだけである．

今の限られた形にもかかわらず，昆虫，植物，鳥類，考古部門の各々において，幸いに極めて稀に見る適任者を得て，献身的な研究者として，又運営者としての活動をしておられるありさまを目のまえに見ており，あらゆる不足を補って，現在の活動をしておられるのは，敬服の至りに堪えない．参観者が余り活発でないようにも思われるが，昆虫，植物，鳥類について定期的な，指導会展示会，コンテスト等をやっておられ，又考古学の発掘等に学生連の協力参加を求めておられる活動は，人手不足ということだけでなく，非常に大きい事業と思っておる．

私の子の一人が，野平先生および樋熊先生の指導を得て，小学生から中学生，高校生にいたるまで，昆虫に熱中したことがあり，大学生として，又社会人となってからは全く縁が切れたと思っておったのが，さる10月，九州の任地を訪ねて，宮崎地方の観光の案内をさせたところ，一児の父となっても，常に採集網を携えて，いまだに今の職業には全く関係のない，昆虫に関心をもちつづけており，職業生活すべてに，科学的な物の観方，扱い方をしておるのを見て，今更ながら，少年時の影響の大きいことに感銘したのである．

科学博物館の効果はすぐに目に見えなくとも，長い年月にわたって，根強く顕われて，国民の科学的基盤を高めて行くことと思われる．

小中学生を対象としての事業は特に重要と思われるので，現在の活動を更に推進していただきたい。

最後に，現在に得難き人を得ておることにのみ依存するだけでなく，設備，経費，人員に予算をふやし，又研究者に報ゆる方法を，今以上に考慮せられることを願っておることをつけ加えたい．

アカネズミの繁殖活動

鳥獣研究室 臼杵秀昭

The seasonal reproductive condition of the old world woods mouse (Apodemus speciosus) by Hideaki Usuki

1964年4月から翌年3月までに，260匹のアカネズミ（*Apodemus speciosus speciosus*）を捕獲したので，そのデータから繁殖活動について報告したい。調査地は長岡科学博物館周辺のブナ科を主体とした雑木林であるが一部杉の林も含まれている．なお当地は1年を通して湿度が高く，殆んど80％以上を示し，冬期間は2m程度の積雪をみた。

調査方法

採集にはスナップトラップを用い，餌はカボチャの種子を使った。毎日1回以上調査地を巡回し，採集標本は直ぐに解剖した．そのさい，体重，外部形体の測定，モルティングの有無，胃，腸等の内部器官の測定，胎児数，精巣長径及び短径，精巣の活動状況などを調べ，皮は仮はく製に，内部器官はホルマリン固定した。なお胎児数の計測には肉眼的識別だけによった。

胎児数からみた繁殖活動

一般に動物の繁殖活動は両性を通じて分析されなければならないが，そのうちでも，最も重要なポイントは雌がいつ頃，何匹の仔を産むかということである．ネズミ類の場合は妊娠期間が短いので，胎児を持つ期間は産児の期間とみなしてほぼさしつかえない。そこで妊娠雌個体の胎児数と採集日を以下に示す．

	embryo count
April	5(25)
May	4(30)
June	11(17), 5(16), 4(11)
July	8(21)
August	／
September	10(19)
October	7(3), 10(13), 6(17), 11(17), 8(21)
November	11(2), 12(7), 10(9)
December	8(4), 9(6), 9(25), 11(27), 10(28)
January	11(8)
February	8(23)
March	／

（　）内は採集日を示す．この表から，春と秋に妊娠個体の出現のピークがあるように思われる．妊娠率を示すと（Fig. 1），標本数が少ないので明確ではないが，その傾向があらわれている．妊娠個体の捕獲率は高いと思われるし，またこれらの分析には年令という問題が除外されているので，実際の様子はこの結果と多少の違いが考えられる．但し，このデータから言えることは，8月と3月の他は妊娠個体が得られたということ，つまり1年間を通じて，ほぼ繁殖活動が行い得るということである．もう一つ確かな事として春と秋の胎児数に差がみられることである．春の算術平均が6.1に対して秋はM±S.E.＝10±0.6，S.D.＝1.6であり秋の胎児数の方が大ということになる．

秋期における妊娠個体の出現状況をFig.3に示した．これを調べてみると，10月17日，11月7日，12月5日，12月27日の各日々の近くに出現が集中している．これは繁殖活動の20〜30日週期を暗示しているように思われる．それが妊娠期間か，産仔の性成熟期間か，あるいは偶然によるかは今後の調査を待ちたい．なおSample sizeは10日ごとの雌の数を示す．

精巣からみた繁殖活動

精巣長径の月別変化をFig.2に示すと，その平均値のピークは夏と冬にある．5,6月，10,11,12月に幼獣の出現があることも示している．次に，精巣がactiveかinactiveかを判別する方法として貯精のうと精巣上体尾を調べた．両方共に発達しているときは＋，そのどちらかの場合は±，発達していないときは−として判定した．±の時を0.5として精巣活動率をだすとFig.1のようになる．結局この結果も，ピークが夏と冬にあることを示している．また±個体の精巣長径rangeが16.6−6.7にあったので，その値が大きいからといって必ずしもactiveとは限らない。

結論

雌個体の繁殖活動のピークは6月と10月にみられたが，一方雄側では，それよりも2〜3ヵ月早く2,3月と8,9月にそれがあらわれた．また，8月と3月の他の月には胎児が認められたので，ほぼ1年間を通じて繁殖活動が行い得ると考えてよいと思われる．

文献

1）Jameson, E. W. Jr. 1950. Deteming Fecundity in Male Small mammals. Jour. Mamm., 31:433−436.

2）宮尾嶽雄他．1963．本州八ヶ岳のネズミおよび食虫類第2報．動雑，72:187−193.

Summary

1. Two peaks were found in the apperance of pregnant specimens (i. e. June and October). On the other hand the diagrams of "active" rate and testicle length indicate that their peaks were found in Februaty–March and August–September.
2. The embryo counts of the autumn specimens were higher than that of the spring.
3. From the date presented, the auther is inclined to believe that reproduction of the species can be carried out all the year round.

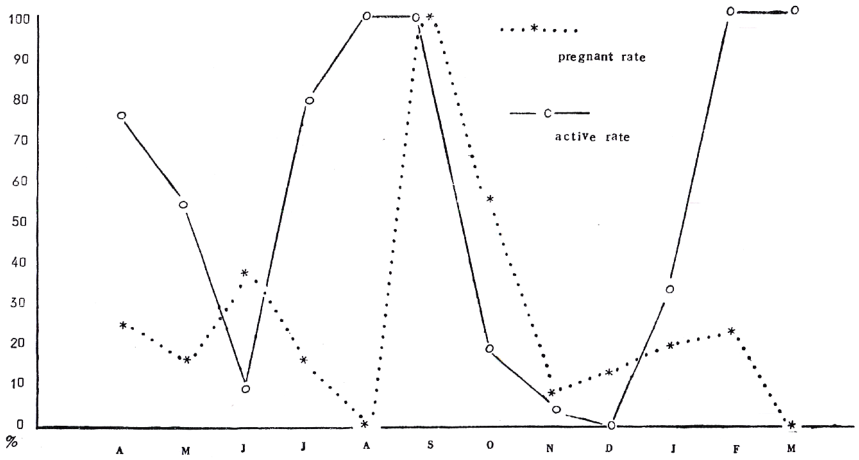


Fig. 1 "pregnant" rate and "active" rate. "Active" rate was determined by Vesicula Seminalis and Cauda epidymidys.

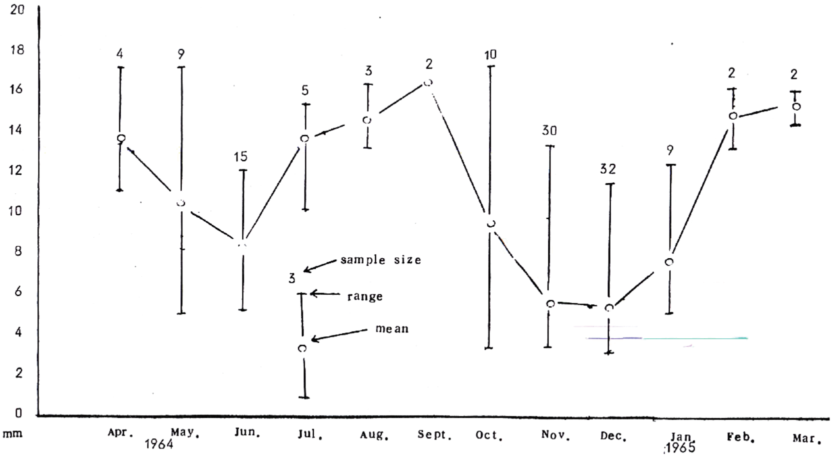


Fig. 2 The testicle length of *Apodemus speciosus*

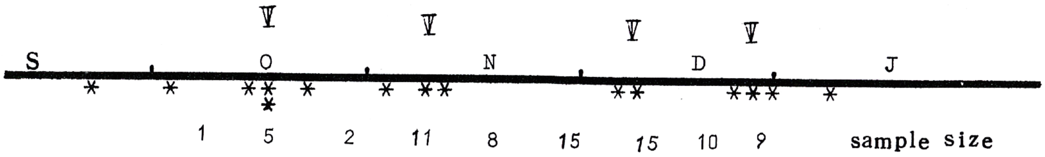


Fig. 3 The apperance of pregnant females. The sample size indicates female specimens collected during each period of ten days.

Ranuculus reptans LINNAEUS var. *fagellifolius* OHWI（イトキンポウゲ）に寄生するウドンコ病菌 *Erysiphe polygoni* について

植物研究室 西 山 邦 夫

は じ め に

ウドンコ病菌の寄主植物数は世界で7000種以上，日本では631種（1965年現在）であるが，イトキンポウゲにはまだウドンコ病菌の寄生は認められていなかった．筆者は加茂市狭口．坪谷富男氏より数年前尾瀬沼で採集されたイトキンポウゲ数株を1965年4月にもらいうけ水盤で育ててきたが，1965年8月にウドンコ病が発生しているのを発見した。坪谷氏に問合せたが，氏のイトキンボイゲには発病また，徴候すら見あたらなかった．尾瀬沼ですでに罹病していたのであれば，坪谷氏のイトキンポウゲにも発病してよいはずであるがそれがなかった．

ではこの菌はどこからきたものであろうか？ 考えられる事は(1)近縁の植物に寄生する *Erysiphe polygoni* がイトキンポウゲに寄生した。(2)悠久山または近くの地に罹病イトキンポウゲが自生しており，分生胞子が飛来して感染させた．(3)尾瀬沼地方に罹病イトキンポウゲがあり，分生胞子が飛来し感染させた．いずれか断定はどきないが(2)については，吉原[1]はイトキンポウゲの自生を認めておらず(3)についても日本の気候状態から推察して，飛来することは可能であるが常時新鮮な活力ある分生胞子をはこぶとは考えられない。これ等の事より(1)が最も有力な考え方で，平田[2]は *Sedum erythrostictum* MIQUEL form. *Variegatum* HARA ベンケイソウに寄生する *Erysiphe Polygoni* を Sedum sieboldi SWEET ミセバヤに接種し発病に成功している。このような事より悠久山近辺に自生しているキンポウゲ科の植物を調査しそれに寄生する菌をイトキンポウゲに接種し発病すれば，それが最も可能性の強い組合せといえるであろう。

この文章を書くにあたり，イトキンポウゲをくださった加茂市の坪谷富男氏，御指導下さった新潟大学農学部植物病理学教室平田幸治教授および内藤秀樹氏，和田久美子氏，本間善久氏に謝意を表する．

病原体の形態

1） 菌 叢

若い菌叢は楕円形であるが，次第に生育するにしたがい不定形となり菌糸は，寄生植物の葉の反対側までも伸長し，菌叢中心部の判別がつかなくなり，葉全体を菌糸がおおってしまう。この頃になれば肉眼ではっきりと証徴が観察され，分生胞子が白く見える．菌叢の発育は葉茎，花の地上部全てでおこる．

2） 菌糸，附着器，吸器

菌糸：枝分れは少なく，分枝の伸長は直すぐで，葉縁を通り反対側へ伸びていく．菌糸巾は4μ～6μで，4μ～6μ×38μ～36μ の細長い細胞が縦につながったもので，菌叢の先端部には気中菌糸は見られない。附着器：菌糸を寄主に附着させる器管で，菌糸側より凸状に突出している．吸器：養分を吸収する1核の1細胞よりなる器管で，寄主植物表皮細胞の中に侵入し発育しながら養分を吸収する。吸器が大きくなるにしたがい養分吸収量も大きくなる。直径が8μ～13μ の球形で附着器と細い管で連絡されている。

3） 分生子梗・分生胞子母細胞・分生胞子

肉眼で観察できる程度の大きさの菌叢には，分生胞子が形成されている．まず菌糸の一部が凸状に突起し，そこに2分した菌糸の1核が移行し菌糸と膜で分けられる。この細胞が2分し2細胞となり，下部の細胞が分生子梗になり，上部の細胞が分生胞子母胞子となる．分生胞子母細胞はさらに2分し第1次の分生胞子を作る．第1次分生胞子がある程度発育すると，母細胞は第2次分生胞子を作る．第1次分生胞子が成熟し飛散すると第3次の分生胞子が作られる。このように分生胞子は次々と作られる．分生胞子は短径13μ～17μ×長径27μ～33μ の惰円形である．

4） 子嚢殻・子嚢・子嚢胞子

子嚢殻は80μ～100μ の直径を有した球形で越冬するための器管であり，10月中旬頃から観察されたが，12月17日現在まだ子嚢は作られていなかった．子嚢形成には相当の時間を必要とするものと思われる．

お わ り に

以上菌の形態を述べてきたが接種試験をしていないので筆者の推察通りの断定はできないが可能性の強い組合せがあるものと思われる．接種が不成功に終れば，これはますますむずかしいものとなってくるが，次回その結果を報告させてもらうことにする．

1） 吉原正秀（1958）．悠久山の植物．長岡科学博物館シリーズ，(4)：34pp.

2） 平田幸治氏，新潟大学農学部植物病理学教室教授．

表 1.　悠久山附近に自生するキンポウゲ科の寄主植物と菌名

寄　主　植　物　名	菌　名
Glematis apiifolia A. P. DE CANDOLLE ボタンズル	*Erysiphe polygoni* ?
var. *biternata* MAKINO コボタンズル	*E. polygoni*
C. stans SIEBOLD et ZUCCARINI クサボタン	*E. polygoni*
C. terniflora A. P. DE CANDOLLE var. *robusta* TAMURA センニンソウ	*E. polygoni*
Ranunculus cantoniensis A. P. DE CANDOLLE ケキツネノボタン	*E. aquilegiae*
R. quelpaertensis NAKAI キツネノボタン	*E. aquilegiae*
Thalictrum minus LINNAEUS アキカラマツ	*E. aquilegiae*
Trautvetteria japonica SIEBOLD et ZUCCARINI モミジカラマツ	*E. galeopsidis* ?

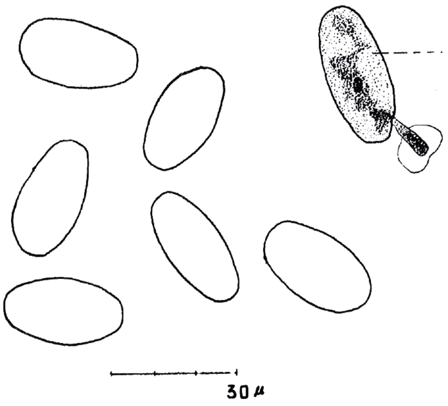


図 1：分生胞子．（イ）は発芽した分生胞子．

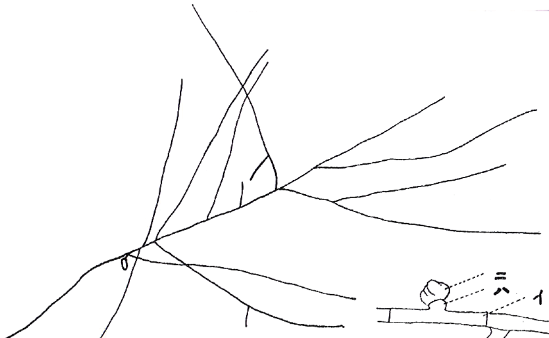


図 2：若い菌叢・枝分れは少なく伸長は直すぐで惰円形状を呈す．

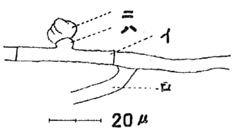


図 3：（イ）菌糸．（ロ）枝分れした菌糸.(ハ)附着器。(ニ) 吸器：寄生植物表皮細胞 の中に入っている．

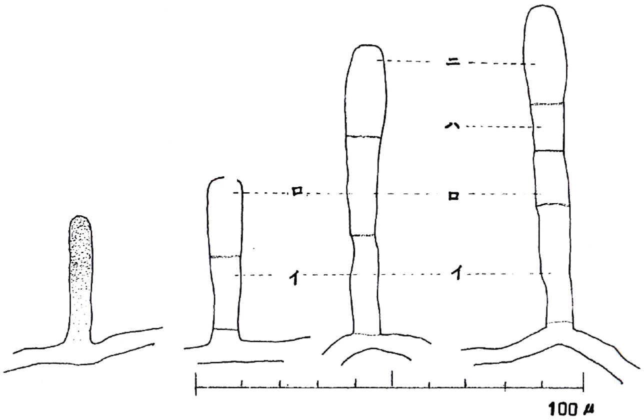


図 4：（イ）分生子梗．（ロ）分生胞子母細胞．（ハ）第二次分生胞子．（ニ）第一次分生胞子．

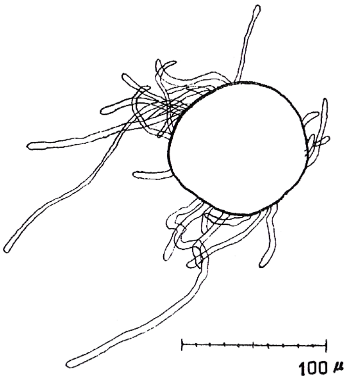


図 5：子嚢殻．

長岡市．岩野原遺跡　―調査略報―

考古研究室　中村孝三郎

遺跡の所在地，長岡市深沢町岩野原．**調査期日**，昭和40年8月18〜23日（6日間）．**主催**，長岡市教育委員会．**担当**，長岡科学博物館考古研究室グループ。**参加者**，長岡高校。第二長岡高校．三条商業高校．関原中学。深才中学等生徒．90名。

遺跡の古年代，縄文時代後記（三十稲場〜三仏生式土器を残した生活期．推定 3000年前）

岩野原遺跡は，信越国境の松之山附近から流れでる渋海川が，信濃川と合流する北側の角折点にあって，対岸の越路町にある縄文晩期の朝日遺跡に相対している。遺跡は西方が標高80mの松山で，東にむけなだらかに扇状傾斜した細い舌状台地のやや中央に位置し，渋海川のつくった沖積水田地帯との比高は約20〜30mで，現在，台地の大部分は煙草，野菜等の畑となっている．

発掘調査は，参加諸兄姉の努力と，好天候に恵まれ，また宿舎の正林寺の皆様や，地元深沢町 1丁目の町民諸氏の絶大な御支援をえて順調に進展することができたことをここに深く感謝する次第です．

発掘溝は第1，2，3の各地点にわたって設定され，その長さも2m：140mに達した．しかし主点をなすものは縄文後期址の第2地点で，ここには東西にわたって7本のトレンチ（第1図）を設けた。その長さは2m：88 mで，44区劃．発掘面積は176平方メートルであった．その結果，当時の遺構として，第3T、で1基．第6T で1基。第8T で1基の炉址が検出されたが，さらに 22日の午後から第8T で，深さ約70cmの最下層をなすローム（赤土）層の直上面に設置された第4号炉址が検出され，その炉を中心に床面の追求がなされ，第4,8,5の各トレンチにまたがって，円形プランの完形住居址（第1図）がよく原形を保って発見された。

その他，出土遺物としては，各構からおびただしい土器や，多くの石鏃，石錐，大小の石斧，板状石器，石錘，凹石，敲打の石器類が出土し，その量はリンゴ箱70箇以上に達した．土器は刺突文等を主系とする三十稲場式（後期前半）と，磨消縄文を主軸にする三仏生式（後期後半）の注口土器や，壺。あるいは深鉢形土器等であった。また装身具としては小さな鼓形の朱彩された土製耳飾りなどが含まれていた．

○　**炉　址**　第1号炉址(第2図)　この炉址は第3T2区のやや中央辺から発見。表土から深さ36cmの地点で，直径約35cmの無節縄文の施された深鉢の下半部が中央に伏せられ，口縁破片がその破損ヶ所に補当されていた。またこの周辺は大小の石塊や，多量の三仏生あるいは三十稲場式の土器類が多く散乱してみられた。

○　第2号炉址（第3図）第6T2区の北壁に密接して検出された炉址で，長さ 20〜40cmの自然石6箇が，やや方形状に石組みされ，中央に厚手の無文土器が埋められていた。附近からは多くの三十稲場式土器が検出された．この炉形は三十稲場式炉の典形的な形体をなし，第2地点では最も古い形体のものであった。

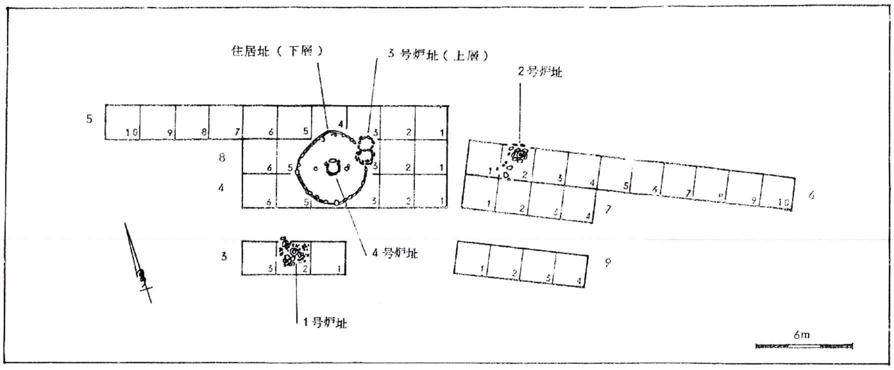
○　第3号炉址(第4図)は，5T3区の地表下約40cmの地点から検出され，その形は 10〜30cmのきわめて扁平の自然石 11箇を単列に配石した円形部分と，その片方に 15箇の小扁平石を二重縁状に半円形に附加配置した長径1m 20cm．短形 20cmのダルマ形石囲炉で，伴出土器は三仏生式が主であった。

以上3基の炉は黒色土中に設けられていて，床面は部分的には確認されたがその多くは不鮮明であった。

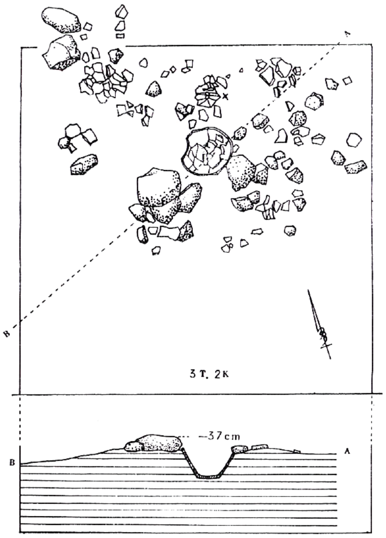
○　第4号炉址（5図）　さきに検出された第3号ダルマ形炉址の2m西側。深さにして約65cmの地点から，10個の長形状石塊で円形に配石された直径80cmの第4号炉が発見された。炉を中心に床面や柱穴の追求がなされたが，床面がローム（赤土）直上に設定されていたためにその検出はきわめて容易であった。この住居址は第3号炉をもった住居とは重復的築構造をなすものであった。

住居址(第1図）　4号炉址を中心とした岩野原第1号住居址はローム上設置のため実に鮮明に確認され，埋土するのが惜しい程であった。その形は直径4m20cmの円形を呈し，幅20cm前後の周溝をめぐらし，中央に炉が築かれ，柱穴は周溝沿いに大小15箇所検出された。また内部に直線的に四つの小支柱孔がみられた。外周柱穴の多くは内傾を示し，この住居形は円錐形の住居構造が強く推定されるものであった。平坦に踏み堅められた床上からは三仏生式深鉢や，石鏃，磨石斧，石錘等が検出されて住居址の時間的なものがよく看知された．

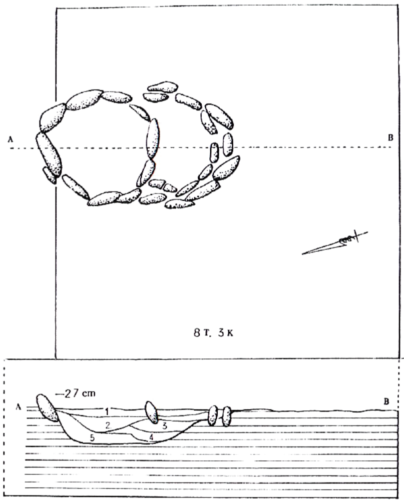
縄文晩期や後期時代は，赤土の上に厚く堆積した黒土層の中にその生活面があるため，住居の確認はきわめて困難で，そのため過去の幾発掘に失敗を重ねてきた新潟県の古代住居の研究も，さきに縄文晩期の中魚郡泉竜寺の円形住居の検出がなされ，またこの度の岩野原第1号住居の確認がなされて，越後縄文時代住居の編年にさらに一頁が加えられたのであった．



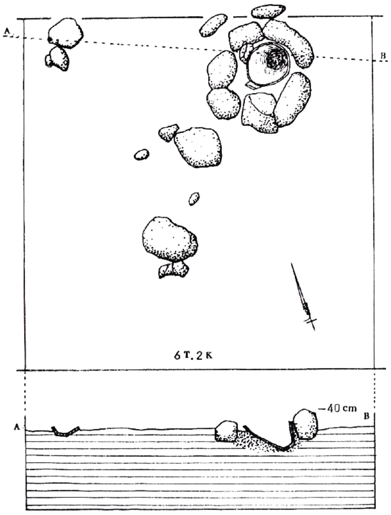
第1図　　第2地点　　発掘溝及び住居址と炉址，位置図



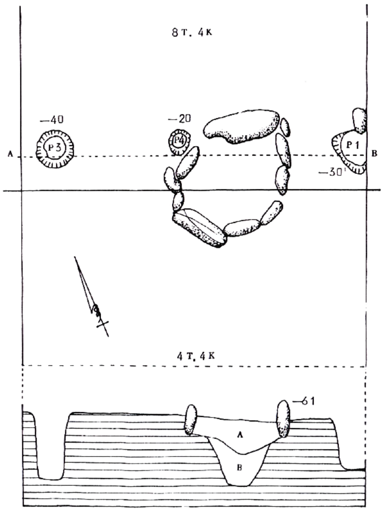
第2図　　1号炉址



第4図　　3号炉址



第3図　　2号炉址



第5図　　下層住居址中央の4号炉址

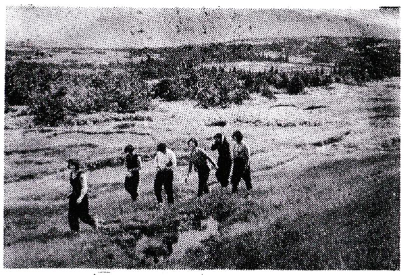
区別		岩野原	生活期
歴史時代		■	窯址
古墳時代			
弥生式時代	後期		
	中期		
縄文時代	晩期		
	後期	■	第二地点
	中期	■	第三地点
	前期		
	早期		
無土器時代			

苗場山頂湿原のトンボ

樋 熊 清 治

1) は じ め に

苗場山頂にひろがる高層湿原（標高 1800—2145.3 m）のトンボ相については，いままでに，樋熊（1952），桜沢（1953），藤沢（1959），によって9種が報告されている．私は，1965年8月6日の調査登山で，次の種を確かめることができた（図，1）.



図，1　苗場山頂の高層湿原

2) 種類とわかったこと

キイトトンボ（1♂），アオイトトンボ（4♂♂）[3]，ルリボシヤンマ（1♀）[1,2,3]，カラカネトンボ（1♂）[3]，カオジロトンボ（4♂♂）[1,2,3]の5種.

キイトトンボ *Ceriagrion melanurum* SELYS は，今回の調査で初めて採集された。この種は南方系のもので，青森県まで北上している。垂直分布では，この産地が日本では最高のもので，採集地は，おおよそ 2080m である.

また，アオイトトンボは，すでに藤沢[3]によって報告されているが，キイトトンボの生息地に近いところ（2080m）で，同種とおなじような羽化直後のやわらかい多数の個体を見ることができた。旧北系の種で，四国，九州の南部を除く日本全土に分布し，亜高山帯に産地が多い.

3) ま と め

苗場山頂に生息する種類は，今回の5種と，すでに知られているオツネントンボ[1,2]，オオルリボシヤンマ[3]，タカネトンボ[3]，アキアカネ[1,2,3]，ナツアカネ[1,2]を合せて10種になった.

苗場山の火山活動は，洪積世末に終息したといわれる。その後，湿原が形成されてから進入定着した種は，移動力のあるものや，広布期にある若い南方系種で，この山が，尾瀬ヶ原や志賀高原の湿原からへだたっているために，概して貧相である原因になったのかもしれない.

文　献

1) 樋熊清治（1952）．中津水系の蜻蛉相概観．中津の自然（中津渓谷生物相調査団），7—10。

2) 桜沢英郎（1953）．苗場・小松原及び其の南麓の昆虫．越佐昆虫同好会会報，7(1): 19—23.

3) 藤沢正平（1959）．苗場山の蜻蛉。苗場山研究中間報告第1号（下水内教育会），23—30.

百草の池（越後駒ケ岳）のトンボ

樋 熊 清 治

昨夏（29/Ⅷ，'65），2—3の高山昆虫を採集する目的で，越後駒ヶ岳（2002.7m）に何回目かの登山をした.

この山のトンボ相については，今までに一つも報告がないので，いくぶん時間をかけて観察した本峰直下の百草の池（1550m）の生息種について，知見をメモしておきたい。

採 集 品 目 録

1) アオイトトンボ（1♂）
Lestes sponsa HANSEMANN

2) ルリボシヤンマ（3♂♂2♀♀）
Aeschna juncea LINNAEUS

3) タカネトンボ（1♂）
Somatochlora uchidai FOERSTER

4) カオジロトンボ（3♂♂）
Leucorrhinia dubia orientalis SELYS

カオジロトンボは，今回はじめて採集し，雌も1—2頭みることができた。この高層湿原の水生昆虫は，毎回の登山で，いくぶん興味をもって注意していたが，その生息には気づかなかった。この種が，近年の進入であるか，前からすんでいたのか，過去の調査が不充分であったために，はっきりさせることができない。

なお，カオジロトンボの県内産地は，妙高高谷（こうや）の池[1]，苗場山頂湿原[2]，小松原湿原[2]，尾瀬ヶ原[3]が記録されている。この報告で駒ヶ岳が新しく追加されることになるが，本県にはまだ他にもたくさんの分布地があると思われる。

文　献

1) 井上真一（1941）．新潟県各地の昆虫（其の四）〔妙高山附近案内記〕．昆虫界，9（92）：37—44.

2) 樋熊清治（1952）．中津水系の蜻蛉相概観。中津の自然，7—10。

3) 朝比奈正二郎（1954）．尾瀬ヶ原の蜻蛉類．尾瀬ヶ原，758—768.

（長岡市立科学博物館昆虫研究室）

博物館だより

予約受付

今号から，ＮＫＨを年２回発行することになりました．購読をご希望の方は，本号と次号分で100円，郵送料20円（10円切手２枚でもよい），計120円をそえて，当館「ＮＫＨ係」あてにお申込みください．

○研究報告ご希望の方はお知らせください

- 室谷洞窟（1964）　¥600　〒70
- 中土遺跡（1965）　¥450　〒40
- 長岡市立科学博物館研究報告No.3（1964）　¥600　〒80
- ＮＫＨ，Vol.2，No.1，2，4　各¥50　〒10

○39年度のおもな行事

★ アンデス古代文化展・桜展／４月15—30日（館内）：22888人

★ 生物夏季学校／８月5，7，25日（館内と公園内）：195人

★ 北信越博物館研究協議会第２日会場／９月11日（館内と八方台休暇センター）

★ 植物昆虫標本（第13回）・生物生態写真（第６回）展示会／９月22—26日（厚生会館中ホール）：5000人

★ 生物研究発表会（第１回）／９月26日（厚生会館小ホール）：150人（発表者，小２人，中６人，高２人）

★ 理科教育研究会（市理科教育研究会共催）／40年１月27日（長岡文化会館）：230人

○昭和39年度の入館者数しらべ　　平均１日：153人

月別	個人			団体			合計		
	おとな	こども	計	おとな	こども	計	おとな	こども	計
4	10580	3020	13600	1997	8862	10859	12577	11882	24459
5	3613	406	4019	1135	14684	15819	4748	15090	19838
6	804	275	1079	148	447	595	952	722	1674
7	409	203	612	222	166	388	631	369	1000
8	1456	1177	2633	244	385	629	1700	1562	3262
9	414	186	600	133	580	713	547	766	1313
10	717	360	1077	315	2000	2315	1032	2360	3392
11	385	172	557	120	42	162	505	214	719
12	43	9	—	—	—	—	43	9	52
1	20	5	—	—	—	—	20	5	25
2	32	7	—	—	—	—	32	7	39
3	63	42	105		98	98	63	140	203
計	18536	5862	24398	4314	27264	31578	22850	33126	55976

あとがき

「友の会」のＮＫＨを，館報で出すことになって，あのころの責任が，どうのこうのと冷やかされて，とうとう，年度内のもう１号まで私が編集することになってしまいました．次号はページも増して，館外の方からも投稿をお願いできそうです．内容は，これ以上むつかしくならないように，中・高校生の皆さんが，十分理解できるものにしなければと考えています．

長岡地方だけは，昨年以上に小雪の冬になりそうで，研究のまとめも，大いにはかどっております．皆さんはいかがですか．（樋熊記）

ＮＫＨ（長岡市立科学博物館報）No.7

昭和41年１月30日発行　¥50（〒10）

編集・発行　長岡市立科学博物館（長岡市悠久山公園内）

印刷所　株式会社 三秀社（長岡市城内町３）